

家庭科教育の保育領域における視聴覚教材の制作 —子どもの食生活—

三輪聖子*¹ 石川麻希子*²

*¹生活科学科生活科学専攻 *²大阪府吹田市立西山田小学校

(2015年11月20日受理)

Production of audio-visual teaching material in the area of early childhood education and care of home economics education —Food life of infancy and early childhood—

*¹Department of Home and Life Science, Major in Home and Life Science, Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

*²Suita Municipal Nishiyamada elementary school

MIWA Satoko, ISHIKAWA Makiko

(Received November 20, 2015)

要 旨

現代社会では中学生や高校生が直接乳幼児に関わる経験はほとんど皆無に等しい。乳幼児について学ぶ機会は、家庭科の保育学習のみである。しかし家庭科の授業時数は非常に少なく、限られた時間で効率よく授業展開するには、視聴覚教材の活用が有効である。そこで、効率的で使用しやすい視聴覚教材の開発を目的とし、視聴覚教材の制作を試みた。制作した教材の有効性を判断するため、中学生と家庭科教員に検証を実施した。結果、本視聴覚教材は、有効性が認められた。

1. 目的

現代社会において中学生や高校生が直接乳幼児に触れたり、関わったりする経験を持つことは、ほとんど皆無に等しい。乳幼児について学ぶ機会は、学校教育での家庭科の保育学習のみではないだろうか。これまでの先行研究からも保育学習の重要性は多く知見が得られている¹⁾。

しかし、家庭科の授業時数は非常に少ない。例えば、中学校3年間で学ぶ総授業時数は

3,045時数である。そのうち家庭科に割り当てられている時数はわずか87.5時数、全体の2.9%に過ぎない。この少ない時数のうち保育領域に充てられるのは、13%程度である。この限られた時間の中で効率よく効果的に授業を展開するには、視聴覚教材の活用が有効である。視聴覚教材の効果についてはすでに報告されている²⁾。

けれども現在ある視聴覚教材は、時間的に長いものや内容が限定的であるなど、授業内で使用するには難しいものが多く、使用しや

すい教材は少ない。

そこで、本研究では効率的で使用しやすい視聴覚教材の開発を目的とする。

2. 方法

中学校「技術・家庭」家庭分野の保育領域の授業で使用する視聴覚教材として、家庭科教育の保育領域を「衣生活」「食生活」「住生活」「発達と遊び」「人との関わり方」の5つに分けて制作する。ここでは、生命維持のために欠かせない「食」に焦点を当て、乳児期の母乳・人工乳、離乳食、幼児食を取り上げる。1教材は10分程度とし、50分授業内で使用しやすくする。

〔制作方法〕

- ①教材の内容を精査し、決定する。
- ②ハンディビデオ、デジタルカメラ、携帯カメラを使用し、動画・静止画を撮影する。撮影は、本学開催の子育て支援「ママ・パパアゴラ」の参加者、本学卒業生、学生の友人に協力依頼をした。撮影期間は2013年5月中旬～11月中旬。
- ③ナレーションをボイスレコーダーで録音する。
- ④ Video studio X 5 を用い編集する。

〔教材の検証〕

2013年11月下旬に名古屋市立H中学校3年生と家庭科教員1名に視聴を依頼し、検証する。

3. 視聴覚教材の内容構成

内容構成は、乳幼児期の食事摂取の仕方を区分した「乳児期」「離乳期」「幼児期」と近年食生活の課題として多く取り上げられる「食物アレルギー」の4構成とした。

(1) 乳児期

「乳児期」は、母乳栄養と人工栄養を取り上げる。母乳栄養は、乳児が母乳を飲んでいゝる動画を使用し、子どもと母親の接し方を実感させる。乳児が授乳中に寝てしまい、口だけを動かし続ける可愛い動画で生徒たちに乳児のかわいさを伝え関心を持たせる。

人工栄養は、育児用粉ミルク、哺乳瓶の写真と実際にミルクの作り方を動画で示し、粉ミルクやお湯の量、適温への冷まし方を伝える。哺乳瓶は空気を飲み込ませない持ち方に気を付けることを動画で示す。母乳と人工乳を飲んだ後、必ずゲップをさせることを伝え実際に動画を示す。

母乳栄養と人工栄養の各利点をあげる。母親の状況に応じて選択肢が増えるような内容とする。

(2) 離乳期

「離乳期」は、初めに離乳食の必要性に触れる。成長に伴う栄養・エネルギー不足だけでなく、咀嚼機能、ひとりで食べる力、味覚、生活リズムを育むことも理解させるようにする。

離乳期の4つの区分は、「ごっくん期」「モグモグ期」「カミカミ期」「パクパク期」といった擬音語を用いわかりやすい表現とする。映像は、ご飯の調理形態を用い、水分が多い粥から普通のご飯への変化で示す。

市販のベビーフードも静止画で紹介し、粉末やレトルト、用途や味の種類、月齢など多種多様であることを伝える。

また、手作りに市販品を加え、献立に変化を付ける使用方法も提案する。離乳食は、子どもにとって新しい食べ物や食べ方を経験することであり、食べる楽しみでもあることを知らせたい。

(3) 幼児期

「幼児期」はおやつを重視する。幼児は、3回の食事だけでは栄養素やエネルギー不足となり、それを補うためにおやつが必要であることを伝える。

また、この時期は、自分で食べたいという思いや好き嫌い、食事のマナーや食習慣を身に付ける時期でもある。これらを通して、生徒たち自身の食習慣を振り返って、食生活を考えるよう問いかける内容になっている。

(4) 食物アレルギー

「食物アレルギー」は必要のない子どもも多いが、近年では事故のニュース報道が多くなっている。そこで食物アレルギーに触れることにした。アレルギーに関しては、法律も年々整備され、特定原材料に指定されている食材を使用している加工品は、商品にアレルギー表示が義務付けられている。このような社会の動向も知り、他の人と同じものが食べられないので食事が楽しめないのではなく、代替品があるので食事を楽しむことができることを伝えたい。

以上の4構成について内容を示した。本来は、生徒自身の体験によって実感することが望ましい。しかし、現状では難しく、限られた時間で最大限間接体験できるように視聴覚教材を活用し、経験値をあげることに力を入れた。

そして「技術・家庭」家庭分野の保育領域が扱う子どもは幼児が対象である。教科書に「子どもの食生活」は生活習慣のなかに位置付けられており、食生活だけに焦点を当てた学習はしていない。そこで中学生に必要な内容は何かと考えたとき、成長過程により、なぜ食生活が変化していくのかを大きな流れで簡潔に理解できるような構成とした。乳幼児の食事を通して、幼い頃の自分自身がどのような食生活を経てきたか、をこちらから問い

かけながら興味・関心がもてる内容を重視した。

4. 視聴覚教材の検証

(1) 目的

視聴覚教材を制作するだけでは、有効性を判断できないので、中学生と家庭科教員に視聴してもらい、検証を試みる。

(2) 方法

授業内で視聴し、その後、無記名式質問紙に記入する。質問内容は、生徒に対して理解度を問う問題が4項目、食生活に関する問いが1項目、感想や改善点を問う自由記述が1項目の全6項目である。

家庭科教員は、視聴覚教材について改善点や感想、5段階で評価を尋ねる。また、家庭分野（保育）の授業についての自由記述を求める。

(3) 結果及び考察

①対象者の属性

中学3年生31人、男子17人、女子14人である。

②視聴覚教材の理解度（発達の区分）

食事摂取の仕方から「幼児期」「乳児期」「離乳期」はどの順番で発達するかを問うた。

結果は正解22人(71.0%)、不正解9人(29.0%)であった。

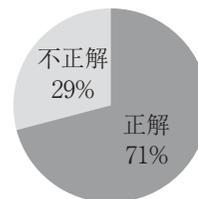


図1 発達の区分

正解は、「乳児期」→「離乳期」→「幼児期」である。不正解には、無回答が1人含まれる。誤答は、「離乳期」→「幼児期」→「乳

児期」の解答が16.1%と最も多かった。

中学生は、幼児が対象なので乳児と離乳は理解しなくてもよいが、子どもの食生活の大きな流れと成長過程の順序は理解する必要があると考える。

③視聴覚教材の理解度（育児用ミルク作りの注意点）

ミルクを作る時の温度の目安についての理解は、正解が100%であった。選択肢は「1. 母親が飲んでみて、飲める程度」「2. うでの内側にミルクを落として、温かいと感じる程度」「3. 冷水で冷やして、冷たいと感じる程度」の3つであり、正解は2である。

これは動画でもミルク作りの後、印象的な文字とともに乳児が火傷することを伝えたため、インパクトがあったのではないかと考えられる。

④視聴覚教材の理解度（おやつの意味）

おやつを食べる理由の理解は、正解30人（96.8%）、不正解1人（3.2%）であった。不正解の理由は、解答は1つにもかかわらず複数を選択したことによるものである。

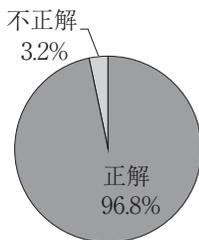


図2 おやつの意味

おやつは子どもの楽しみでもあるので、「子どもが喜ぶから」の選択肢も間違いとは言えない。しかし、栄養補充のためという最も重要な理由を理解してほしい。

⑤食物アレルギーの食生活

食物アレルギーについての理解は、正解が100%であった。「アレルギー物質の入っていない代替品もあるので、周りの人と同じよ

うに楽しめる」という理解が必要であるが、全員が理解できていた。

⑥嫌いな食べ物

嫌いな食べ物を自由記述で回答（複数回答あり）を求めた。結果は表1である。

多種類の食べ物があげられているが、最も多いものは野菜である。特にトマトは6人があげており、全体の19.4%にあたる。セロリやゴーヤといった香りと味に特徴のあるものは、苦手な人も多い。きのこ類も全体で7人22.6%と少なくない。肉類は、鶏肉が1人

表1 嫌いな食べ物

	食品	人数		食品	人数
野菜	トマト	6	その他	肉 鶏肉	1
	セロリ	4		牛乳	2
	ゴーヤ	4		マヨネーズ	1
	人参	3		ジャム	1
	ピーマン	3		マーガリン	1
	グリーンピース	2		落花生	1
	アボカド	2		おでんの昆布	1
	なす	2		ひじき	1
	大根	2		小豆	1
	たけのこ	1		レーズン	1
	オクラ	1		そうめん	1
	ねぎ	1		カレー	1
	レタス	1		納豆	1
	パプリカ	1		梅	1
	キャベツ	1		豆	1
きのこ	きのこ全般	2	キムチ	1	
	しいたけ	4	漬物	1	
	しめじ	1	青汁	1	
魚介類	魚	4	無し	4	
	貝	3	無回答	1	
	えび	1			
	タコ	1			
	うに	1			

と少なく、魚は4人である。現代の子どもは、肉は好きだが魚は苦手という傾向があると言われているが、ここでも同様の結果であった。

一方、嫌いな食べ物無しは、4人と全体の12.9%であった。嫌いな物がある生徒が多いことがわかる。しかし、嫌いだからと言ってまったく食べないということではないと考えられる。また、大人になって味覚が変化することもあり、特に問題は少ないのではないかと考える。

⑦意見・感想

自由記述で意見の多かったものを図3に示した。「わかりやすく説明されていた」35.5%、「知らないことを知ることができた」16.1%、その他の感想として、「赤ちゃんがかわいい」「赤ちゃんに関心を持った」「ミルクだけでこんなに発達したことに驚いた」「好き嫌いせず食べられたらよい」「これからの生活に活かしたい」「親の意見をきいてみたい」などがあつた。

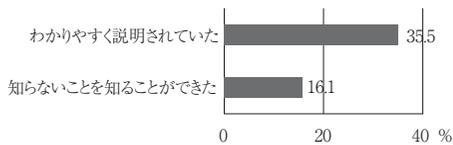


図3 視聴覚教材への意見

これらの意見・感想から、中学生の学習範囲である幼児期だけでなく、子どもの成長という時間軸で捉えることにより、自分自身への気づきや子どもを身近なものとして捉えることができたのではないか。赤ちゃんがかわいいと思える気持ちや驚きの気持ちを感じられたことも本教材の有用性であると考えられる。

また、視聴覚教材を通して、今後の課題や自分のあり方を考える意見もあつた。これは中学校の目標にもある「課題を持って生活をよりよくしようとする能力と態度を育て

る。』³⁾に当てはまる。ただ視聴して理解するだけでなく、自分を見つめ課題を発見し考えをもつことができたことは、目標が達成できた教材と言える。

⑧改善点

改善点としての意見は、表2に示した。ナレーションについての意見が多くみられた。ナレーションは、聴覚から直接情報を伝えるものなので重要な因子である。声の質や高さ発音など個人の特性にもかかわってくるのでナレーターを考える必要がある。字の大きさはすぐに改善が可能である。時間制限があり、特定な部分が詳細になるのはバランスが悪いので、どこまで情報を加えるかは検討が必要である。

これらの意見を参考にして、視聴覚教材の再構築を実施することとした。

表2 改善点

・ナレーションがよくない
・離乳食のご飯の写真が区別しにくい
・離乳食の表の文字が読みにくい
・字が小さい
・「しかし」にもう少しインパクトがあるとよい
・全体的にグラッとしているので、音楽などで変化を持たせた方がいい
・おやつはどのようなものから食べさせればよいか知りたい
・アレルギー患者の代替品はすべての食品に対応できないものもあるので、それを教えてほしい

⑨家庭科教員の評価

家庭科教員における視聴覚教材の評価は、5段階評価で最も高い「大変有用である」であった。理由は「画面が見やすかった」「アレルギーの紹介があり、とても助かる」「ミルク（人工栄養）は熱いと乳幼児が火傷するという事を考えることができる」があげられていた。改善点として「離乳食の表が見

くい」があり、生徒と同様の意見であった。これらを踏まえ、再構築する。

視聴覚教材は、動画や写真を使用し、実際の子どもの姿から成長過程や様子を映し出すので、実態が捉えやすく効果的であることが明らかになった。

5. 結論

視聴覚教材の制作は、中学校「技術・家庭」家庭分野の保育領域の「食」に焦点を当て、乳汁栄養、離乳食、幼児食、食物アレルギーを扱った。中学校は幼児のみを扱うが、本教材は、乳幼児の成長として発達を理解できるようにした。内容は中学生に合わせたものとなっているため、平易なものである。

中学生への視聴による検証結果を次にあげる。

- ・生徒が食を通した保育に興味・関心を持ち、食に対する課題を意識したり自分の考えをもったりした。
- ・子ども（赤ちゃん）をかわいいと思える気持ちが見われた。
- ・知らなかったことを知ることができた驚きや喜びを感じた。

家庭科教員の評価は次のとおりである。

- ・5段階評価の最も高い「大変有用である」であった。
- ・画面が見やすく、アレルギーの紹介は助かるという意見であった。

以上の結果から、制作した視聴覚教材は有効性が認められ、教育現場で使用してもよいと考える。しかし、データはすぐに古くなってしまうので改訂していくことが必要である。

参考文献

- 1) 岡野雅子・伊藤葉子・倉持清美・金田利子
「家庭科の幼児とのふれ合い体験と保育施設での職場体験学習の効果の比較」2011『日本家庭科教育学会誌』54(1) p 31-40
- 2) 伊藤葉子「保育観に及ぼす視聴覚教材の方向性の影響」1988『日本家庭科教育学会誌』30(3) p 48-53
- 3) 文部科学省『中学校学習指導要領解説技術・家庭編』2008 教育図書